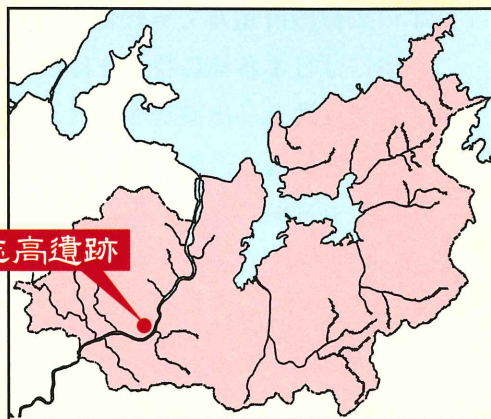


し だ か い せ き
志高遺跡

由良川～加古川の道

場所：舞鶴市字志高



貼石墓

由良川は京都府北部を流れる唯一の一級河川で流域に住む人々に恩恵と災害を与え続けています。その恩恵を受け由良川下流域には約 3km 間隔で由良川が形成した自然堤防上に集落が営まれ続けていました。志高遺跡はそのひとつで由良川下流域の左岸に位置する自然堤防上に営まれ続けた縄文時代前期から江戸時代に至るまで断続的に続いた集落遺跡です。

志高遺跡に人が住み始めたのは縄文時代前期で建物跡などは明確ではないものの、出土した土器は近畿と日本海側の影響を受けたもので羽島下層Ⅱ式や北白川Ⅲ式までの縄文時代前期の土器が全体の器形が窺える状態で出土するものがあり、西日本の縄文土器を知る上で貴重な資料として位置づけられています。縄文土器には島根県の西川津式の影響を受けたものもあり、日本海を介して文化の交流があったことを示しています。その中でも形の分かる 51 点は器形や文様構成において情報量豊かであることから舞鶴市指定文化財になっています。

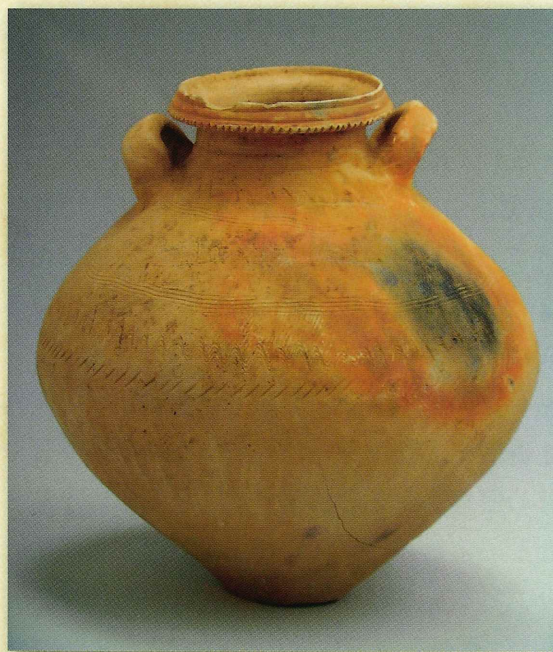
また、弥生時代中期には竪穴式住居で構成される集落と周りに溝を廻らせた方形周溝墓という家族墓が造られ、中でも有力者は大きな方形で墳丘の側面に板石を貼った方形

貼石墓という墓に葬られ、集落の中で階層格差が生まれているのが分かります。丹後では京丹後市の奈具岡遺跡、小池墳墓群、与謝野町の日吉ヶ岡遺跡や寺岡遺跡、千原遺跡、宮津市の難波野遺跡でも確認されており、丹後地域の有力者の墓と考えられています。この頃には日本各地に特色を持った墳丘墓が出現し、畿内では方形の盛土の周囲に溝を掘る方形周溝墓、出雲地域では方形の墳墓に四隅を突出させ、板石を貼る四隅突出型墳丘墓などがあり、丹後の貼り石墓は山陰との交流を物語るものと考えられています。

また、方形貼石墓の川側には当時の船着き場と考えられる堰堤状の盛土に貼石や集石を行った護岸も発見されています。志高遺跡の側を流れる由良川は当時、日本海から瀬戸内海へ抜ける由良川-加古川ルートは交通の要所であり、南方産のキイロタカラガイが中に入った壺が見つかるなど当時の交流を知る上でも貴重な資料です。



縄文前期土器



タカラ貝の入っていた壺